今回の舞台

山形県
最上郡戸沢村

地域クリエーターの履歴書

**この企画は地域を導く人財“地域クリエーター”の育成の軌跡を明らかにすることを目的にしている。
『企業の将来はトップで99％が決まる』とは船井幸雄の言であるが、企業体と同様に、地域にも
カリスマとも言える組織を導くリーダーが存在する。
その彼のリーダーシップこそ
地域社会の未来を99％まで左右すると言えそうだ。
地域クリエーター達の原点にフォーカスし、
彼らが成し遂げた地域活性化の真髄に迫る。**

インタビュー/文　**杤尾 圭亮**
船井総研入社後、地域創造・活性化チームに志願し、創設に情熱を注ぐ。現在は、地域再生行脚100を実践し、成功事例を求めて全国を渡り歩く武者修行中。その成功ノウハウの定着・浸透の手法には定評がある。
連絡先：keisuke.tochio@funaisoken.co.jp

「草の根活動」が生み出したホンモノの国際交流

CREATER'S　PROFILE

氏名	職業
はが　きんいち 芳賀　欣一	畜産農家
	趣味 ジョギング 絵画（日本画）

年代	出　来　事
1943.10.23	山形県　戸沢村　に生まれる
1962.03	香川県　豊島農民福音学校　農村生活学校卒業
1966.03	東京都　農村伝道神学校　中退
1969～1971	アメリカ農業研修
1971.04	戸沢村農業青年会議所　設立
1982	戸沢村青少年育成推進会議　会長
1982	戸沢村青少年村民会議　会長
1985	栃木県　アジア学院との交流開始
1990.11	戸沢村と韓国との交流開始
1990.12	戸沢村国際交流塾　設立
1992.08	日韓児童交流開始
1992.09	キムチづくりで第１回　日韓婦人交流開催
1993.08	日韓友好際　を開催
1994.11	アジア食文化交流を開催
1997.09	日韓友好の村　「高麗館」オープン
1999.03	戸沢村　国際交流協会　を設立
2005.02	第20回国際交流基金　「地域交流賞」を受賞

道の駅に併設された「高麗館」へ。

山形新幹線の最終駅「新庄」から30分ほど最上川を下ると突如出現する朝鮮風の建造物郡。今回の舞台は、この朝鮮風総合施設「高麗館」が建つ人口6,200人の「戸沢村」での国際交流である。近年、80年代に脚光を浴びた国際交流の成果に対して疑問が投げかけられ始め、全国的に国際交流は縮小する傾向にある。そんな中でひときわ強い光を放つのが、戸沢村の韓国・松鶴面（ソンハク村、以下ソンハク村とする）との国際交流である。同村では、1990年にスタートしたソンハク村との国際交流が見事に開花し、1997年には韓国をモチーフとした施設「高麗館」を道の駅「とざわ」に併設。今年度は折からの韓流ブームもあって黒字を実現する。またソンハク村との交流は、特産品のないこの小さな村に「戸沢流キムチ」、「戸沢流冷麺」などのユニークな特産品を生み出し、同村の活動は2004年に独立行政法人　国際交流基金から表彰を受けるに至っている。今回注目するクリエーターは、この韓国との国際交流を草の根活動として継続し成功させた「芳賀欣一」その人である。芳賀氏は、同氏とソンハク村の牧師であるオム氏との個人的な交流を村全体の交流に、そして現在の多分野にわたる交流にまで発展させることに成功している。15年にもわたり、遠く離れたソンハク村と戸沢村をつなげ続けたたものは何であったのか。今回は、芳賀流とも言うべき同氏の独特なリーダーシップから地域クリエーターのあるべき姿を探る。

自らの育った地域を客観的に見ることで情熱は醸成される

既に15年にわたり、国際交流協会を会長として支えてきた芳賀氏。しかし芳賀氏の地域への貢献はこれだけにとどまらない。同氏は農村青年会議所の開設や、戸沢村での牧畜を基本とした草本農業の提示など、地域のエポックメイキングな出来事には必ず関わっていた人物であった。しかし、村長や議員といった政治家ではなく、もちろん役場職員でもない芳賀氏をここまで突き動かす情熱は一体どこから生まれるのか。そこには客観的に村を見ることによって生まれた現状への強い危機感、そして使命感にも似た熱い情熱があった。

栃尾 最初にお伺いしたいのは芳賀さんの活動姿勢についてです。芳賀さんは国際交流協会の会長という多忙な役回りの他にも様々な地域の活動に携わっているとお聞きしています。しかし地域の活動を行うに当たり、地域の行政に携わる役場職員でも議員でもない農家を選ばれたのはなぜでしょうか。

芳賀氏 農業という職業を選んだ理由は、できるだけ自由な時間を確保し社会貢献活動を行いたいと考えていたからです。現在の生活パターンも、午前４時ごろに起きて午前９時ごろまでには大体の仕事を終わらせてしまいます。ですからその後の時間は全て、何の束縛もなく地域の活動に費やすことができるのです。

栃尾 ということは、職業を選択される時には、地域への情熱を既にもっていらっしゃったということでしょうか。多くの場合、地域クリエーターはなんらかのきっかけによってそのような強い思いを持つに至るようですが、芳賀さんがそのような情熱を感じたのはいつ頃だったのでしょうか。

芳賀氏 私の場合、地域への危機感や思いを初めて強く感じたのは、戸沢村の外に出てこの村を外から見つめ直したときであったと思います。私は17歳～27歳まで村外で学ぶ機会を得ました。香川県の農村生活学校、東京の神学校、そしてアメリカへの留学と様々な地域で農業について学びましたが、その間も故郷である戸沢村には定期的に帰るようにしていました。そうすると、村の中では見えなかった故郷の良さ、そして多くの長所に気付くことができました。しかし同時に、戸沢村そのものに、急速に埋没していく農村としての姿をも

自然豊かな東北地方のいち農村地域に、国際交流の花が咲いた。

見つけてしまうことになったのです。

例えば、既に当時から優秀な若い人たちが村から流出していました。もちろん村に優秀な人がいないわけではありません。しかし戸沢村に限らず多くの農村の若者が都会に出てその文化を形成する一方、農村は急速に廃れていきました。またこの最上地方では冬は雪が深く、夏は最上川がたびたび氾濫するため、特に農業に対する「あきらめ感」のようなものが蔓延していました。そしてそういった農家の暗い背中がますます若い人や子供の農家、農村ばなれを加速させていました。

もし私の故郷への漠然とした思いが強い危機感と使命感に変わった瞬間があるとするならば、おそらく外からこの点に気付いてしまった時であったと思います。幼少からキリスト教にふれる機会が多かったため、一時は東京の貧困地域での宣教活動と地域活動で迷ったこともありました。しかし結局この地域への強い危機感が現在の道を選択させたのだと思います。

地域クリエーターの条件、内への優しさ、外への強さ、そして期待感をもたせること

この成功の中核には、芳賀氏という個人に加え、常に「国際交流協会」という組織の影響があった。同村の国際交流協会は、小学生を韓国に派遣する「日韓児童交流」や、今ではソンハク村での冬の特産物となった「タラの芽」や「エノキダケ」の栽培方法を伝達する事業が中核となっていた。同協会はこれまでの交流の発展に応じて、個人の集まりから勉強会へ、勉強会から協会組織へと発展してきた。協会は、補助金を一切受けず会費によって運営されることで独立性と自律性を保ち、行政との最適な協力関係を構築することに成功している。しかし全てを会費負担にするということはすなわち会員の負担が増えることを意味する。ではそのような負担にも関わらず、他に仕事をもつ村民がなぜ会員となり、またなぜその金と時間と労力を惜しげなく交流活動に注ぎ込んでいるのか。そこには、芳賀流とも言えるリーダーシップによって実現された、「その日、その時、その場所に行けば何か良い事あるかも」という独特な期待感が存在した。

栃尾 ソンハク村と戸沢村との国際交流において大きな役割を果たした国際交流協会ですが、会費も時間も労力も全て自前という独立組織とお聞きしました。多くの場合、補助金を用いない組織では会員の参加などが滞ってしまう傾向があると言われますが、どのような施策で成功に導いたのでしょうか。

芳賀氏 戸沢村の国際交流協会もおっしゃるような問題を常に抱えていました。そのために私は二つの方向性で会を運営していました。一つは組織内には圧倒的な優しさの心で臨むということ、もう一つは会員に常に期待感を持ってもらうよう心がけることです。

第一に心がけたことは、組織内に圧倒的な優しさの心で臨むことです。おっしゃるとおり一番我々の頭を悩ませたのが、会費を滞納する、もしくは活動を欠席する会員に対する対応でした。毎回参加する会員にとって、欠席したり会費を滞納したりする行動をとる会員は非常に気にかかるらしく、退会を促される場合も少なくありませんでした。しかし私は、何事もなく会に参加し活動できる会員よりも、何らかの事情で活動を欠席せざるを得なかった会員の方がよっぽど苦しんでいる、と考えます。私は若いときに随分と貧しい環境におりましたから会費の３千円という金額が、ある人にとってはとてつもなく重い意味を持つことがよくわかります。また時間に対しても同じことが言えます。私は外部に対してはリーダーとしての強い態度で臨み、何かあれば、全ての責任は私一人でとるつもりでいます。しかし内部に対しては、どのような状態に陥ろうとも率先して会の仲間を心から信頼し、思いやるよう心がけています。そうすることで、もし会を欠席する会員がいても、その行為に腹を立てるのではなく、そうせざるを得なかった会員の状況を思いやれるようになる会員を増やしていくことができます。これは私のポリシーになってしまいますが、組織内部の意識や効率性はこういった圧倒的ともいえる優しさの姿勢で臨むことで改善していくのではないでしょうか。

第二に心がけていたのは、会員に常に「その日、その時間、その場所に行けば何か良い事あるかも」という期待感を持ってもらうことです。ただこの期待感は、一つの行動に常に保

食産品を通じて訪れた人々に国際交流を体感していただく。

芳賀氏の草の根活動は表彰されるに至るが、表彰自体の実績を氏は謙遜する。そしてそれは単にひとつの通過点に過ぎない。

証されているわけではありません。もちろん良いときが多いにこしたことはありませんが、それほど効果が出ないときもあります。しかし、会員や参加者には、いつも大きな期待感を抱いていてもらうことが会員の率先した参加につながります。では、そのためには何が必要となるでしょうか。私は、そこに会を引っ張るリーダー、クリエーターの役割を見ます。具体的には組織を引っ張る人間自身が期待感を抱かせる人間であれば、この「何か良いことあるかも」という期待感が自然に生まれると考えています。

私の場合、戸沢村での他の地域貢献活動が会の活動に好影響を及ぼす場合があります。例えば、私が牧場で行っている子供たちへの体験学習をあげてみましょう。この体験学習は、なかなか好評で子供たちは本当に楽しそうに参加してくれます。そうすると、楽しんで学習した子供の親は私に対してのある種の期待感を持つようになるのです。村全体が狭いので、そういった小さな活動を必ず誰かが見ています。そしてそういった実績を積み重なることでその人の信頼や期待感は徐々に大きくなるのだと思います。

生き様を見せて、未来を示す

独特なスタイルのリーダーシップにより、国際交流を通じた地域の活性化を成功に導いた芳賀氏。それでは、芳賀氏はどの程度自分で描いた地域像に戸沢村が近づけたと考えているのだろうか、そして未来にどのような戸沢村を見ているのだろうか。そこには、芳賀氏が自ら歩んできた道を示すことで、周りの人間に少しでも「農村」という選択肢を魅力的に感じさせ、戸沢村をそして農村を活性化させるという地道だが壮大な目標があった。

栃尾 これまで数々の施策で活性化を行っていらっしゃいますが、今後芳賀さんはどのような戸沢村の未来を目標とされるのでしょうか。よろしければお教え下さい。

芳賀氏 私はこれまで戸沢村を、若者もお年よりも元気で働くことができる活気ある豊かな地域にしたいと考えて行動してきました。しかし、理屈だけで活気ある地域にすることはできません。都会は依然として若者にとって魅力的な地域であり、また以前私が感じていた農村の「あきらめ感」が完全に払拭されたわけではありません。

しかし私はこれからも、自分の生き様を示すことで、十分な収入があり、午後は自由に時間を使いながら田舎で生きることができる、という選択肢があることを伝えていきたいと考えています。決して、私の歩む人生が最も良いと考えているわけではありません。しかし、農家は決して暗いものではなく、明るく楽しいものであることを理解してもらいたいと思います。そしてもし、やる気と根気のある方が私のような行き方を目指して、農村で働いてくれるならば、きっと農村は再び活気を取り戻すはずだと考えています。

【まとめ】

国際交流という分野において芳賀氏を成功に導いたのは、芳賀氏自身が歩いた人生によって培われた独特のリーダー哲学と地域への熱い思いであろう。その哲学である、外への強さ、内への優しさは、自らの生き様を外に示すことで得られる信頼によって初めて完成する。現在も芳賀氏は、収入である1,500万円の４分の１を地域貢献へと投資している。もちろん芳賀氏の生き方が全てではない。しかしその生き様を見せ続けることによって、“農村で豊かに生きる”という選択肢は必ず地域を志す人財を生み出していくのではないだろうか。